

学問のすゝめ

先週は、「学ぶ力」向上学校訪問と市教育委員会訪問があり、外部の方に多くの授業を参観いただきました。こういう機会を前向きに捉え、今後の授業改善につなげてほしいものです。何といたっても「教師は授業で勝負」です。私なんか元々授業力が低い中、部活動の指導はそこそこのレベルになり、「あいつは部活指導しかできない」と言われるのが嫌なこともあり、授業も年に一つは新たなオリジナルを増やそうと心掛けました。また、自分の授業実践を研究論文にしたり、技術・家庭科が全員集まる研修会では、代表で実践発表があたり意気に感じて取り組んだりしたものでした。(ただ、当時の指導主事に全員の前で厳しい指摘を受け、今ではよい思い出です。)

さて、草野先生はとてもチャレンジングな授業をしました。多くの部分で他の教科にも一般化できるところがあり、非常に参考になりました。専門的な部分は他に譲るとして、私はその取組姿勢が何よりうれしかったです。きっとプロセスの中で多くの学びとの出会いがあったことと思います。改めて教職員こそ学び続けなければいけないと感じました。そして、「学び」というキーワードからなぜか「学問のすゝめ」に発想が飛びました。「学問のすゝめ」の冒頭は、誰もが知っている「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」です。では、なぜ「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」が「学問のすゝめ」なのか。実は福沢諭吉は、この現代ではあまりに有名な言葉を伝えたかったのではないと語っています。冒頭に続くのは、「されども今広くこの人間世界を見渡すに、かしこき人あり、おろかなる人あり、貧しきことあり、富めるもあり」とこの世の中には貴賤や貧富の差があるということを著しています。そして、その理由は、『実語教』という寺子屋等で使われた教材があるのですが、そこに「人学ばざれば智なし、智なき者は愚人なりとあり。されば賢人と愚人との別は学ぶと学ばざるとに由(より)て出来るものなり」とあり、これに影響を受け、つまり「人学ばざれば智なし、智なき者は愚人なり」の言葉が「学問のすゝめ」の本質ということなのです。

「少にて学べば、則ち壮にして為すことあり。壮にして学べば、則ち老いて衰えず。老いて学べば、則ち死して朽ちず。」は江戸時代の儒学者・佐藤一斎「言志四録」の中の言葉です。西郷隆盛は終生の愛読書としました。「学び」は一生続けるものであり、少年のとき学んでおけば、壮年になってから役に立ち、何事かを為すことができる。壮年のときに学んでおけば、老年になっても気力が衰えることはない。老年になっても学んでおけば、ますます見識も高くなり、社会に役立つこととなり、死んでからもその名は残る、という意味です。かの吉川英治は「宮本武蔵」の中で、「我以外皆我師也(われいがいみなわがしなり)」と語らせています。学ぶ気持ちがあれば、本も師になり、自然も師になります。私は、教えるプロでなく学びのプロになりたいと思います。その姿を見せることが子どもにとっての一番の教材だと思います。(2023. 11. 20)